

透析医のひとりごと

「透析医会誕生前後のころ」 河内 衛

昭和 36 年、わが国は国民皆保険を達成し、高度成長期を迎えようとしておりました。

私は昭和 37 年、新潟大学第二内科（木下康民教授）に入局しました。教室では腎・呼吸器・感染症・内分泌・循環器疾患の診療や研究が行われていました。

当時、尿毒症は治療手段がなく、特に若い人たちに多く、まことに悲惨な状況でありました。なんとか尿毒症患者を救わなければならないという信念のもと、教室では平沢由平先生を中心にして、昭和 38 年 IPD、40 年より血液透析が開始されました。

当時、すでに米国では維持透析にて 10 年生存者がおり、わが国でも透析療法の普及は喫緊の課題でありました。昭和 42 年には血液透析が保険収載されましたが、保険家族についてはまだ自己負担が大きく、経済的には容易なことではありませんでした。昭和 47 年、透析患者は身体障害者福祉法の対象となり、更正医療が適応、治療費の自己負担は軽減され、また内シャント、デスポダイアライザーの普及等が患者の生存率の向上に繋がることとなりました。

私も患者の増加にともなって、昭和 48 年 8 月、市中病院を経て新潟県央地区の三条市に医師 2 名の有床診療所を開設しました。当初はまだ県内でも透析施設が少なく、上越、下越地区の患者さんも引き受けており、慢性腎不全はもとより急性腎不全、パラコート中毒に至るまで色々な症例を経験し、多忙をきわめていました。

この頃から全国的にも私どもと同様な施設が急増し、患者数の増加とともに国民医療費に占める透析医療費率が突出し、世の批判を浴びるようになりました。そんな中で、このままでは透析医療は崩壊してしまうのではないかとの反省から、平沢由平先生、愛知県の大田裕祥先生、他の全国各地の透析医の先生方により、都道府県透析医会連合会が昭和 52 年に結成され、これが日本透析医会の始まりでありました。

当初は総会といっても某製薬会社のホールで 10 名前後の出席しかなく大変侘しいものでありましたが、私も平沢先生のお供をして、今井久弥先生と数年間出席したことを懐かしく思い出します。いまや両先生とも故人となれましたが、当時、平沢先生の透析医会への思いは、腎不全や透析の諸問題をまじめに取り上げて将来のあり方を国に提言するという壮大なものでありました。しかし、診療報酬等に関し色々な意見をまとめて厚生省や日本医師会と折衝をするも、単なる圧力団体としかみられず、まったく相手にされず、平沢先生達の苦勞は大変なものでありました。

そこで浮上したのが透析医会の社団法人化でありました。詳細については本欄で大田和彦先生が「医会誕

生秘話」として述べておられますが、法人化にあたっては2億円の基金があつという間に集まり、全国の透析医の関心の深さがうかがわれました。色々紆余曲折もあつたようではありますが、めでたく公益社団法人日本透析医会が誕生しました。私はその頃より体調不良のため医会への活動は遠のいておりましたが、平沢先生はお会いするたびに会の活動状況について、透析医会は透析療法学会と車の両輪のように活動するのだと熱意を込めて話しておられたのを昨日のように思い出されます。

日本透析医会も法人化して今年度で30周年ということですが、すぐれた透析医療を国内のみならず、世界の発展途上国に普及させることも医会の役割ではないかと考えます。ご検討をお願いいたします。

私も透析医療に関わり半世紀を過ぎ、先日傘寿を迎えましたが、この間最も悩まれたのが透析業務よりもむしろ患者さんの多彩な合併症対策でありました。他科の知識はもとより学際的研鑽が必要であつたように思います。振り返るとひと時も気の抜けなかつた50年のようでもあり、光陰矢の如し、あつという間に過ぎ去つた50年間であつたようにも思います。

塚野目診療所（新潟県）